

第IV部

アスペクト(局面指示体系)

「日本語構造伝達文法」は時空モデルと構造モデルを使って文法現象を考えようとするところに特徴がある。この第IV部では時空モデルを使ってアスペクトを扱う。この文法では「アスペクト」を「局面指示体系」とも呼ぶ。

第13章では「いる」と「している」が対立していることを述べる。

アスペクトの構成要素となる数種類の出来事を設定する。

出来事の種類別アスペクト構成図を作成する。

第14章では 繰り返しのアスペクト図を

第15章では 補助アスペクト図を作成する。

第13章

アスペクト(局面指示体系)

13.1 存在の二様態

a) 「いる」と「している」

日本語では、存在者の「存在」を二様に表現し分ける。存在者が単に「存在する」だけなのか、それとも「何らかの出来事の実現との関連において存在する」のか、これを区別して表現する。

「存在」は「ある」や「いる」という動詞で表現される。ここでは「いる」を取り上げる^{*1}。

ある存在者を単に「存在する」だけのものとして表現するときは、「川上さんは店にいる」のように「いる」だけを用いる。一方、「何らかの出来事の実現との関連において存在する」ものとして表現するときは、「川上さんは店を開けている」のように、出来事を表す動詞に「て^{*2}」をつけてから「いる」を用いる。

b) 「している」は出来事開始後の領域

「店を開けている」というのは、「店を開け始めたあと」の川上さんの存在を表している。すなわち、⑥「川上さんはシャッターをガラガラいわせながら店を開けている」といえば、店の入り口を開ける動作をしている川上さんが存在するのだし、⑦「川上さんは今日は9時から店を開けている」といえば、店の入り口を開けたあと、店を開いている状態に保っている川上さん

*1 「ある」と「いる」の関係については第18章参照。

*2 「て」については 10.3 参照。

が存在する。また、④「川上さんはきのうは店を開けている」といえば、話者の記憶の中に、きのう店を開けた川上さんが存在している。

このように、「開け+て+いる」では、「川上さんが『開ける』という行為の実現と関連して存在している」ことを意味しており、その関連のしかたは⑤「行為中」という形であったり、⑥「行為の結果の状態の保持中」、⑦「発話者の意識の中での行為の記憶」という形であったりする。

以上のことを見図13-1のように示すことができる(図10-10参照)。

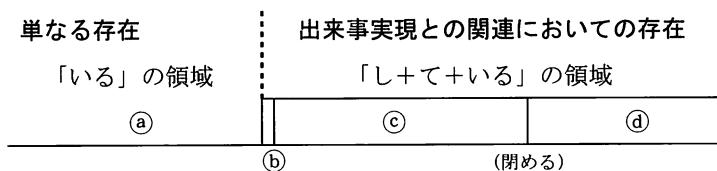


図13-1 「いる」領域と「している」領域

- ⑧では何の出来事とも関連がないので、川上さんは単に「いる」だけ。
- ⑨には「開ける」という行為をする川上さんがいる。「店を開けている」
- ⑩には開けた状態を保持している川上さんがいる。「店を開けている」
- ⑪では店を開けた川上さんが話者の記憶の中にいる。「店を開けている」

「店を開けた」「開けていた」のように「た」の形も「し+て+いる」の領域にある(⑨と⑩の間、⑪と⑫の間、13.4 参照)。「た」は元来「て+ある」であり、構造が $=t(e)-\theta=a(r)-$ である(10.5「完了基」参照)。(「てある」と「ている」の違いについては第18章で扱う。)

「いる」の領域と「している」の領域が別々に存在しているのであるから、存在者は「いる」のか「している」のか、このどちらかで、つまり、二項対立の形で表現されることになる。

(日本語では、現在という時点では、一回的で具体的な出来事は、「動き」そのものの形ではなく、「存在」という形でしか表現できない。)

c) 「いている」は理論的に不可能

「いる」と「している」が対立しているのであるから、「している」は「いる」の対立相手である。ここから、「いる」は「している」に組み込めない、という原則が導き出される。確かに、組み込んで得られる形式「いている」は存在しない。……「いている」は理論的に不可能なのであった。

従来の諸研究では「する」と「している」が対立すると考えられていた*1。この対立は「する」が出来事を点(全体)としてとらえ、「している」が出来事を幅としてとらえる、という形での対立であって、直観的には理解しやすい。一方を単位としての出来事、非アスペクトで、一方を進行中等の局面にあるものとしての出来事、アスペクトでとらえた形での対立である。しかしこれは出来事を単位で扱うかアスペクトで扱うかの相違であり、アスペクトの対立としてとらえているわけのものではない。これはちょうど1格とガ格の違いを直観的にとらえやすいハとガの違いとしてとらえることに似ている。

「する」と「している」の対立はこのような性質のものである。この対立では、形態的には「いる」の対立相手として「いている」を要求してしまう。従来、なぜ「いている」という形式が不可能なのか説明できなかつたが、それは「する」と「している」の対立で考えようとしていたからなのであった。

d) 「できている」の可不可

「～ている」は、行為や出来事を表す動詞を存在の表現に変換する形式であると考えることができる。こう考えると、「いる」を含め、もともと存在しか表さない動詞(状態を表す動詞を含む)には、この形式を使う意味がない、ということになる。確かに、例えば「できる」という動詞が「詩吟ができる」というふうに「能力がある」という純粹に「存在・状態」に属する意味で使用される場合には「詩吟ができる」という表現は使う意味がない。一方、「できる」を「動作や事態が実現する」というような意味で使用する場合には「～ている」の形式の恩恵を受ける……「上手に運転ができる

*1 たとえば、国立国語研究所(1985)。

／静かに自習ができている／夕食ができている／にきびができている」*1。

e) 二領域動詞

「できる」は「いる」の領域にもあり、また「している」の領域にも置かれる。このような動詞を「二領域動詞」と呼ぶことにしよう。「見える」「読める」等の可能を表す動詞、「思う」「考える」等の思考を表す動詞、「属する」「適する」等の属性を表す動詞に見られる。

13.2 出来事

a) 出来事の概念……動き的出来事・存在的出来事

一つの動詞を用いて表される行為・心理作用・出来事・状態・存在の概念そのものを「出来事の概念」と呼ぶことにする。現実界に実際に生起する一ひとつつの具体的な事態に対応している必要はない。

「帽子をかぶる」「無事を喜ぶ」「雪が降る」等の行為・心理作用・出来事を「動き的出来事の概念」とし、「詩吟ができる」「川上さんがいる」等の状態・存在を「存在的出来事の概念」とする。

b) 出来事

出来事の概念が現実や仮想の具体的な事態と対応してとらえられるような場合、これを「出来事」と呼ぶことにする。〔典型的な存在的出来事は、時と場所を限定されたときに出来事として扱いやすくなる（13.7c）参照。〕「車を運転しているときに竜巻を見た。」という文が現実や仮想の事態と対応している（と想定される）場合、ここには二つの出来事が入っていることになる（「運転する」「竜巻を見る」）。

なお、出来事は、ル形で名詞を修飾する場合、（進行中の）アスペクトを表すかのような効果をもつことがある（『発展A』A14.3 参照）。

近くに文房具を売る店がある。／前を走る車に若葉マークがついていた。

*1 有情物でない「運転・夕食・自習・にきび」が、なぜ「てある」ではなく「てい
る」をとるのか、という疑問が生じる。これについては、第18章「ある」と「いる」参照。

c) 進行相……進行中の局面

「運転している」のように、出来事が「ている」の形をとって「進行中」の局面を表すようになったものを「進行相」と呼ぶことにする。ただし、「存在的出来事」は「進行相」や、次の「結果相<状態>」「結果相<記憶>」にならない（13.1 参照）。

d) 結果相<状態>

「帽子をかぶる」という出来事が実現すると、その後しばらくは「帽子をかぶっている」状態が続く。このように、ある出来事が実現したことの結果として、一定の状態が続く場合、この一定の状態の継続の表現を「結果相<状態>」と呼ぶこととする。「ている(である)」の形で表現される。

e) 結果相<記憶>

また、「帽子をかぶっている状態」が完了した後にもその事実に対する話者の記憶そのものは継続している。「彼はおととい帽子をかぶっている」という表現では、「かぶった」という記憶が発話時点まで続いていることを示している。このような、出来事成立の記憶が継続していることの表現を「結果相<記憶>」と呼ぶこととする。「ている」形で表現される。

この相は話者がその記憶を失うまで有効である。

なお、「645年に大化革新が起こっている」のように、記憶には、他者の記憶を学習により自分のものにしたタイプのものもある。

f) 局面と相

「局面」とは、開始・進行中・完了・結果状態継続中等々の出来事の時間的に区分された一つひとつの部分である。それぞれの局面は対応する表現形式「相」を持つ。話者はある「局面」を指示して、これを「相」で表現する。たとえば、「進行中」の局面を指示して「進行相」で表現する。

13.3 出来事はいくつかの局面を持ち、時間的長さをもつ

「本を読む」という行為に「読み始め」と「読み終わり」があり、その間に「読みの継続」が存在するように、出来事にはふつう、「開始」と「完了」があり、その間に一定の時間を伴う出来事の「継続」がある。そして次に「帽子をかぶっている」というような結果相<状態>で表される局面があり、さらに、「(おととい)帽子をかぶっている」というような結果相<記憶>で表される局面がある。このように、出来事はふつういくつかの局面から成立しており、各局面が時間的長さをもっている。これを図13-2のように図示する。

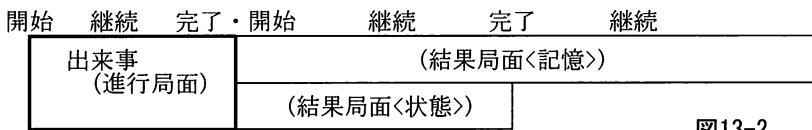


図13-2

「結果局面<状態>」「結果局面<記憶>」は「出来事」の完了の結果として生ずる状態であるので、「出来事」の完了時がそれぞれの開始時となる。

13.4 出来事の諸局面の図示

出来事には上のように、「開始」と「継続」と「完了」がある。これらは一つの出来事のそれぞれの局面を指している。さらに「開始前」「完了後」という局面もある。それぞれの局面の関係を図に示してみる。

a) アスペクト基本構成図 1

図
13-3

局面として大別できるのは出来事の開始前・継続中・完了後である。図の

点線は、アスペクトのとらえられる範囲を示している。

テンスに関わることではあるが、あえていえば、 $-(r)u$ （ル）は開始前を、 $=t-\theta=a(r)-(タ)$ は完了後を表す(第16章、第17章及びA14章参照)。

結果局面<状態>のあとのが $=t-\theta=a(r)-$ （）内に入っているのは、状態としての「書いている」のように、結果局面<状態>の完了(タ)が考えにくい出来事があるためである(「着ている」と比較すると考えやすい)。

開始・完了は局面の概念としては考えられるけれども、日本語では開始・完了そのものを表すことはできない(15.1 参照)。

アスペクト基本構成図は図13-3のようにローマ字を用いて描くのが最善であるが、便宜的に次のようにカタカナを使用することもできる。ただし、カナを使用すると、理解しやすくなる反面、真の構造が把握しにくくなる(40.2, 3参照)。

b) アスペクト基本構成図2 (カナ表示)

開始前	開始	継続	完了・開始	継続	完了	継続
			(結果局面<記憶>) ティル			
	(進行局面) ティー		(結果局面<状態>) ティー		(タ)	
ル	概念/出来事 動詞	—	タ			図 13-4

「—」の部分が「ル」なのか「タ」なのかは、テンスの流れの中で決定される(第16章参照)。ただし、テンスと無関係に(一般的・普遍的に、また概念として)扱う場合には「(r)u」「ル」になる(「動詞-(r)u」「ティル」)。テンスの流れの中では「動詞-(r)u」「ティル」や「動詞-タ」「ティタ」になる(16.4 d) 参照)。

なお、アスペクトはテンスと異なり、「過去・現在・未来」をもたない。もつのは「出来事開始前・開始・生起中・完了・完了後」である。

13.5 出来事の時間的「長さ」はさまざま

テーブルの上からボールが床に「落ちる」場合は、ほとんど時間はかかるない。高層ビルを「建設する」ような場合にはかなりの時間がかかる。出来事はその出来事の内容に応じてさまざまな時間的長さをもっている。

長さの最も短い出来事の一つは、「死ぬ」出来事である。「死ぬ」出来事は「生」から「死」への移行として実現するわけであるが、この移行は開始の瞬間に完了し、継続時間をもたない。

一方、長さの非常に長い出来事の一つは、宇宙の「膨張する」出来事である。宇宙は開闢のビッグバン以来膨張を続け、今なお、そして未来においてもなお、宇宙の存在する限りは膨張していくものようである。

「宇宙の創造者が存在する」という出来事をもちだす場合は、その存在は開始も完了ももたず、無限のように思われる所以で、この出来事が人間の認識できる長さの中で最も長い出来事ということになるのかもしれない。

人間の認識可能な出来事の時間的長さは、瞬間と無限という両極端の長さの間に収まっている。これは図13-5のように図示できる。

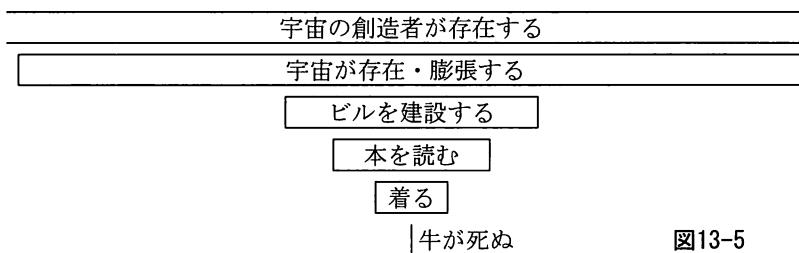


図13-5

13.6 アスペクト構成の基本的なタイプ（①～⑤）

アスペクト基本構成図1、2(図13-3,-4)に基づいて、長さの異なる出来事のいくつかのアスペクト構成図を描いてみたい。①から⑤に進むに従って出来事の長さが短くなる。それぞれの長さの程度は、現実の出来事の長さ、あるいはそれを認知する話者の意識に対応している。伸縮が自在である。しか

し、ここでは分類のために、あえて適當な長さに決めてある。

どの動詞がどのパターンをとるかということは、動詞によってある傾向は認められるものの、固定しているわけではない。従来は、一定の動詞が一定のグループに属するという見方をとる傾向があった^{*1}。が、この文法では、話者の現実認知のありかたに応じて、動詞がそのつどそれにふさわしいパターンをとると考える。

① 開始・完了のない出来事のアスペクト（創造者存在のアスペクト）

継続	
(進行局面)	存在しテイー
(概念／出来事)	(宇宙創造者が) 存在s-

図
13-6

- ・開始も完了も考えられない。認知できるのは出来事そのものと進行局面だけ。したがって、開始前の局面と、結果局面がない。
- ・ただし、③の一般の出来事のように想定することは可能である。
- ・漢語動詞「存在=s-」は、意味的に「いる」のような「存在的出来事」としての性格をもつ一方、形態の面から「動き的出来事」としての性格ももつようになっている。それで、存在的出来事でありながら、「テイル」の形をもっている。（「属=s-」なども同様。13.1e) 参照)

② 完了のない出来事のアスペクト（宇宙膨張のアスペクト）

開始前	開始	継続
	(進行局面)	膨張しテイー
膨張すル	(概念／出来事)	(宇宙が) 膨張s-

図
13-7

*1 金田一春彦「国語動詞の一分類」(1947) (金田一(1976)所収) における動詞の四分類(状態動詞、継続動詞、瞬間動詞、第四種の動詞)が新たな出発点であった。本文法でもこの分類を参考にしている。

- 開始はあるが、完了は考えられない。それで、結果局面はない。
- ただし、③の一般の出来事のように想定することは可能。

③ 一般的出来事のアスペクト（読書のアスペクト）

開始前	開始	継続	完了・開始	継続	完了	継続
(結果局面<記憶>) 読んディル						
(進行局面) 読んディー		(結果局面<状態>) 読んディー				
読み 読み		読んディタ 読みタ				
		読んダ 読みダ				

図
13-8

- 一般的出来事とは、一定の長さをもち、開始と完了が容易に認識できる出来事。
- ここでは、「ティー」は進行局面として認知される傾向が強い。

④ 短い出来事のアスペクト（着衣のアスペクト）

開始前	開始	継続	完了・開始	継続	完了	継続
(結果局面<記憶>) 着テイル						
着テイー		(結果局面<状態>) 着ティー		着ティタ		
着ル 着一		着ティタ 着タ				

図
13-9

- 短い出来事では、「ティー」は結果局面<状態>として認知される傾向が強い。
- 「着タ人」のようにタ形で名詞を修飾する場合、この「着タ」は結果局面<状態>が継続中なら「着ティー」と同じく「身につけている状態」を表すこともできる（図10-16参照）。

⑤ 瞬間的出来事のアスペクト（死のアスペクト）

開始前	完了・開始	継続	完了	継続
	(結果局面<記憶>)	死んデイル		
	(結果局面<状態>)	死んディー		
死ヌ	死んダ			
死n-				

図 13-10

- ・進行局面がない。
- ・「死んダ人」のように名詞を修飾する場合は、結果局面<状態>が継続中なら「状態」を表すこともできる(④参照)。

◎以上のすべての「ティー」には「認知的完了」がある(13.8, A 4章参照)。

13.7 「継続」のみを認知する出来事・状態（⑥⑦）

長さのない出来事「死ぬ」，短い出来事「着物を着る」，ある程度の長さをもつ出来事「読む」「建設する」等，私たちはこれらをそれなりの長さとして認識する。しかし，日常の言語使用においては「継続」のみを認知すれば十分で，「開始」も「完了」も認識する必要がない，つまり長さを認識する必要のない出来事がある。次のようなものである。

a) 長すぎる出来事

「創造者が存在する」「宇宙が膨張する」というような出来事の場合，認知するのは「存在している」「膨張している」という「継続」のみである。このような出来事は，あまりにも「長すぎる出来事」なので，日常の言語使用においては開始や完了まで認識することは必要がなかったり，不可能であったりする。「長すぎる出来事」の図示は図13-6, -7のようになされる。

b) 両端不問の状態

「この道は曲がっている」というのは，結果局面<状態>であるが，このような状態は「開始」と「完了」が認識しにくい。ふつうの言語使用においては「曲がっている」状態の継続だけを認知すればよいのであって，曲がっている状態が「いつ」始まって「いつ」完了(消滅)するのかはあいまいのま

でよい。これは「長すぎる出来事」というよりは、開始・完了を不問のままにする状態、つまり「両端不問の状態」である。

このような「両端不問の状態」のアスペクトは図13-11のように「継続」の部分だけを使用する図として示すのが適当である。(ここでは元になるアスペクト図として⑤を用いたが、③④を元にすることも可能である。)

⑥ 両端不問の状態のアスペクト

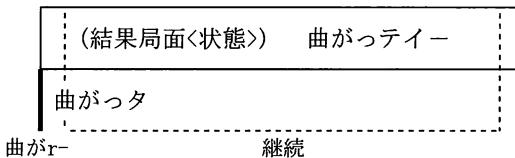


図13-11

「両端不問の出来事」では、タ形は「曲がっタ道」のように名詞を修飾する場合に使用されるのがほとんどであり、その場合、結果局面<状態>が常に継続中なので、タ形は状態を表す(④参照)。それで、次の3つの表現は同じことを伝えていることになる。

- ・曲がっティル道
- ・曲がっタ道
- ・曲がル道*

様態を表す動詞(異なる・適する・そびえる等)がこの⑥に属する。

c) 存在的出来事

「ある」「いる」は行為等と関連のない単なる存在を表す。家具などであれば、損壊してしまうまで「ある」。人間なら、亡くなるまでは「いる」。長さは百年にもなろうか。これは「長すぎる出来事」の図示となるが、図13-1の①の領域での図示となり、進行局面がない。

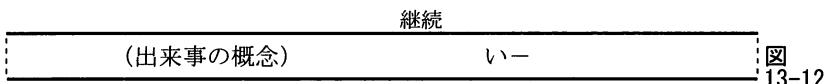
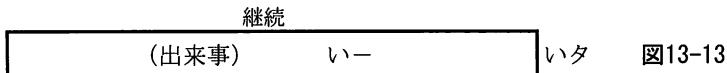


図13-12

* 1 二領域動詞の一つであり、ここでは性質としての存在を表している。「釘が曲がる」のように 状態変化を意味する場合は、「曲がル道」のようなル形での状態描写はできない。(その場合、「曲がル釘」は曲がっていない。)

しかし、通常「ある」「いる」を使うのは、「3時から家にいる」のように、ある限られた期間と場所においての存在としてである。つまり、存在の一部分を切り取っての認知である。図は非常に簡素である(図13-13)。

⑦ 存在的出来事のアスペクト



これも「継続」のみを認知する出来事である。

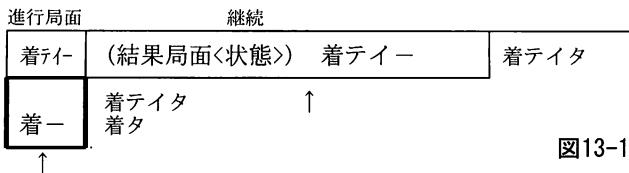
完了「いタ」は、その期間、その場に存在することの完了であって、存在そのものが完了してしまうことを意味しているわけではない。「仮につける区切り」である。

また、捜していた川上さんが見つかったときに「いタ、いタ」とタ形で言うのは、「川上さんはそれまでそこにいたが、この発見によってその存在に対する認知の形が変化した」という区切りの認知からである。それは例えば、「それまでいたのは意外な場所であった」ということかもしれないし、「これからは発見者との新しい関連で存在することになる」ということかもしれない。発見時に「いル、いル」と言えば、存在への認知がその発見の前後で変化がないという認知のはずである。単なる状況把握である。

この「いル」「あル」につく「タ」は、いわば「認知的完了」であって、存在という事態の完了ではない。(『発展A』A4.3では「タ」を局面変化完了認知基としている。)

13.8 認知的完了「～ティタ」「～だつタ」

ちなみに言えば、上述の仮につける区切りの「いタ」の延長上に、進行局面や結果局面<状態>中での「ティタ」がある。さらに確認等の「タ」がある。



進行局面や結果局面<状態>では、もちろんその状況が完了(消滅)すれば「ティタ」の形になるけれども、上図の2本の矢印のように進行や継続の途中であっても、あたかもそこで完了したかのように「ティタ」の形式が適用されることがある。これは「認知的完了」ととらえることができる。着物を着ている状況を発見して、「あっ、着物を着ティタ」と発話するような場合である。発見の前後で状況そのものは変化しないけれども、認知の上で区切りが生ずる。それは、例えば「今まで展開していたことは話者の知らない展開であったが、今は知るところとなった」というような何らかの区切りの認知だろう。もし、「あっ、着物を着ティル」と言えば、そのような区切りの認知は特になく、単に事態の把握にすぎないであろう。

また、「来週のパーティーは水曜日だっタね」のように「～である」で表現できる発話時点での知識を確認するような場合にもタ形を使用するが、これも発話時点までの（不確実な）知識に一応区切りをつける認知的完了ととらえられるものであろう^{*1}。（『発展A』A4章参照）

*1 タ形の特殊な用法といわれるものには、さらに「どいタ、 どいタ」のような「ぞんざいな要求」のタがある。これはタの命令形タレ(「どいタレ、 どいタレ」)のレ(あるいは「どいたり、 どいたり」のリ)が脱落したものと考えられる。 $=t(e)-\theta=ar-e$

第14章

繰り返しのアスペクト

14.1 繰り返しのアスペクト

「～テイル」が繰り返しを表すことがある。その図示を試みたい。

a) 動詞そのものが繰り返しを含意する場合

動詞によっては意味的に繰り返しを含むものがある。「太鼓をたたいてください」と言われて、ドンと1回だけたたく人もあるかもしれないが、ふつうはドンドン……と何回もたたくことだろう。「中学に入ったら自転車で通う」となれば、だれも1日だけのこととは思わないだろう。「たたく」「通う」のような動詞には、動詞自体に同じ動作の繰り返しが一定期間続くことが含意されている。

開始前	開始	継続	完了
	(進行局面)通つテイ-	(省略)	
通ウ	出来事 (自転車で) 通(w)-	通つテイタ 通つタ	
	□□□□□□□□□□		

図14-1

このような動詞も一般的な出来事のアスペクト(13.6 ③)を構成するが、そのとき進行局面は動作の繰り返しをその内容としている。「太鼓をたたいてイル」「自転車で通つテイル」というのは、たたく動作、通う(行く)動作を繰り返していることを意味している。

b) 動詞が繰り返しを含意しない場合

「ステーキを食べる」「牛が死ぬ」のような、本来繰り返しを意味しない動詞でも、「先週からステーキを食べている」「ここ数日、牛が死んでい

る」のように、〔進行局面の継続時間〕が出来事1回成立に必要とされる時間より長く設定される場合には、進行相が出来事の繰り返しを意味するようになる。

「先週からステーキを食べている」

先週から今日まで			(省略)
(進行局面) 食べテイー			
繰り返される出来事			
食べベル	出来事 ステーキを 食べー	出来事 ステーキを 食べー	出来事 ステーキを 食べー
			食べテイタ 食べタ

図14-2

「毎日ステーキを食べている」というふうに、継続時間が長い単位……週・月単位、季節単位、年単位等になると習慣を表すことになる。

「ここ数日、牛が死んでいる」

ここ数日		(省略)
(進行局面) 死んデーイー		
死ヌ	繰り返される出来事 死n-	死んディタ 死んだ

それぞれの短い線が出来事「死n-」

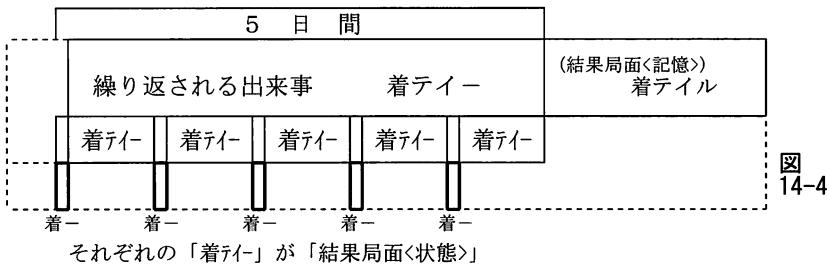
図14-3

「死ぬ」という出来事が繰り返されるのは、常識的に考えて、同一個体においてではないことが明白であるから、この例の場合、同一個体の繰り返しではなく、多数体での繰り返しが生じていることになる。(ある言語を習得しているということは、その言語での常識を身につけていることを含んでいる。)

c) 結果局面<状態>の場合

「青い服を着テイル」だけでは繰り返しを意味しないが、「この5日間青い服を着テイル」と言えば繰り返しを表すことになる。常識では、人や職業

によって多少のずれはあるだろうが、基本的に服は朝着て夜脱ぐから、「服を着る」というのは、1日が単位になるはずである。だから出来事の継続時間が5単位分の「この5日間」となっているこの場合、「着テイル」という結果局面<状態>は、「出来事」とその「結果局面<状態>」のセットが5回繰り返されていることになる。



もちろん、特殊な事情も考えられる。5日間全然脱ぐことができなかつたのかもしれない。一度着て、そのまま脱がずに5日間を過ごしたのであれば、言語形式はそのまで、図は図13-9の「短い出来事のアスペクト」の構成図になる。結果局面<状態>の長さが5日分の長さになるわけである。

状況を認識した話者は、その状況を伝達するために言語形式を使用する。状況は実に多様であるが、それを表現する言語形式は限られている。つまり、一つの言語形式がさまざまな現実の状況に対応している。ここから同じ言語表現に異なる解釈の可能性が生じてくる。柔軟に対処する必要がある。

第15章

補助アスペクト

15.1 補助アスペクト

$-(r)u$ (ル)は開始そのものを、 $=t-\emptyset=a(r)-(タ)$ は完了そのものを表すことはできない。「本を読ム」と言うときはまだ読んでいないし、「本を読ンダ」と言うときはもう読んだ後になっている。あくまでも、 $-(r)u$ は開始前を、 $=t-\emptyset=a(r)-$ は完了後を表す。日本語では開始・完了そのものを表すことはできない。

しかし、出来事の開始そのもの、完了そのものを表現したい場合もある。そのような場合には補助アスペクトの助けを借りることになる。「読み始める」や「読み終える」のように補助的出来事「始める」「終える」を使用すれば、よりきめの細かい局面表現ができるようになる。(とはいって、開始・完了そのものは補助アスペクトを使っても表すことができない。)

補助的出来事には、「読み始める(yom-i=hazime-ru)」の「始める」のように、動詞に直接つなぐタイプのものと、「読んでしまう(yom-i=te-∅=sima(w)-u)」の「しまう」のように「て*」を介してつなぐタイプのものがある。前者は進行の内部の局面であるものなので「進行内補助的出来事」と呼ぶこととする。後者は出来事に時間的方向や心理を補足するものなので「補足型補助的出来事」と呼ぶことにする。

補助的出来事が固有のアスペクトを持つため、「読み始める」のような形式全体のアスペクトは、補助的出来事のアスペクトに従うことになる。

*1 $=te-$ については、図示を含め、10.3参照。

15.2 「進行内」補助アスペクト

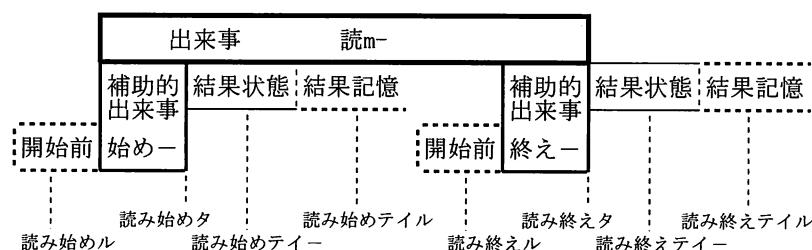
進行内補助アスペクトは図15-1のように、出来事(読ム)の下に補助的出来事を付加する形で図示することができる。

「始める・終える(終わる)」は「死ぬ」出来事同様、基本的には瞬間的出来事なので、図13-10のように幅を持たせずに図示するのが適当なのであるが、ここでは説明のために幅を持たせてある。

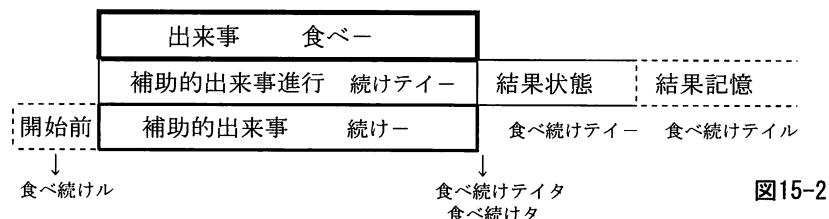
「雨が降りだす」の「だす」は「始める」と同じ図になる。「42キロを走りきる」の「きる」、「レポートを書きあげる」の「あげる」は「終える」と同じ図になる。(意味的な相違については省略。)

「始める・終える(終わる)」

図15-1



「続ける」



「食べかける」の「かける」

出来事	食べる		
補助的出来事進行	かけティー	結果状態	結果記憶
補助的出来事	かけー		
↓			
食べかけていた 食べかけタ			図15-3

この「かける」は出来事開始直前のアスペクトを示すことがあるが、その場合は次の「死にかける」に準ずるものと考えられる。

「死にかける」の「かける」

出来事	死ぬ		
補助的出来事進行	かけティー	結果状態	結果記憶
補助的出来事	かけー	死にかけティー	死にかけティル
↓			図15-4
死にかけていた 死にかけタ			

補助的出来事は「死ぬ」のような瞬間的出来事の中には入れないので外に出てしまう。(ただし、「死ぬ」を一定の時間を要する一つのプロセスとしてとらえようとする場合には図15-3と同じようになる。)

15.3 「補足」補助アスペクト

補足型補助的出来事は次のように、出来事に「時間方向」「完了の心理」を補足する機能をもっている。

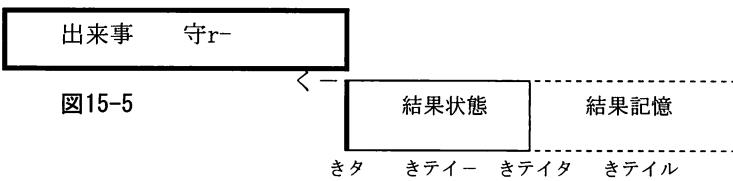
「(て)くる」……時間方向(その時点へ)を補足

「(て)いく」……時間方向(以後へ)を補足

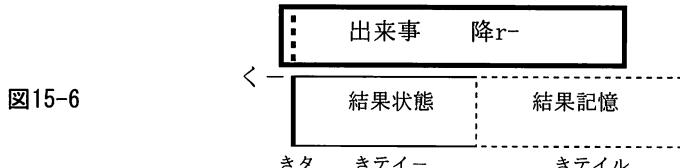
「(て)しまう」……完了の心理(遺憾等)を補足

「(て)おく」……完了の心理(事後への準備)を補足

「(伝統を)守ってきた」の「(て)くる」……後方からその時点へ



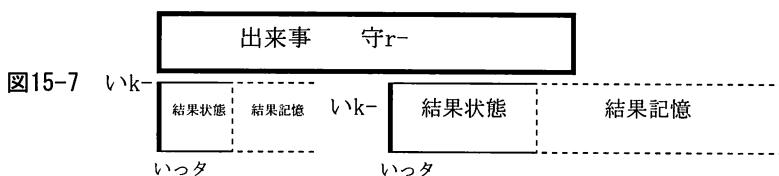
「(雪が)降ってきた」の「(て)くる」……前方からその時点へ……開始



「(て)くる」は、出来事の実現がその時点に至ることを意味する。図15-5のように、出来事がすでに長期間にわたって実現して(後方から)その時点に至っている場合には、その時点までの継続を表し、図15-6のように、出来事が(前方から)その時点へ接近てきて、その時点で実現した場合には開始を表す。「くる」は瞬間的出来事である。

「(伝統を)守っていく」の「(て)いく」

「(て)いく」は出来事の成立が(改めて)認知され、以後(ある終局へ向かって)継続することを意味する。「いく」も瞬間的出来事である。



「食べてしまう」の「(て)しまう」

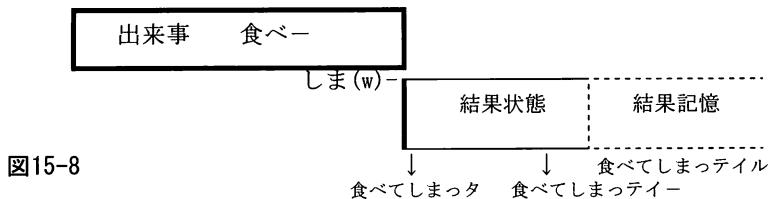


図15-8

完了に一定の感情(決意・遺憾等)が伴っていることを補足する(詳細省略)。

「話しておく」の「(て)おく」

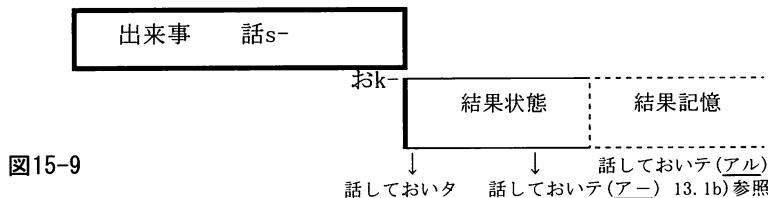


図15-9

完了が、あることへの準備であることを補足する。

15.4 その他の補助的出来事のアスペクト構成

「(食べ)ようとしている」

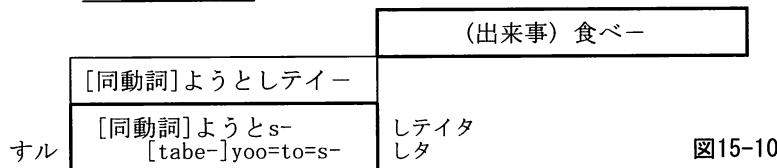
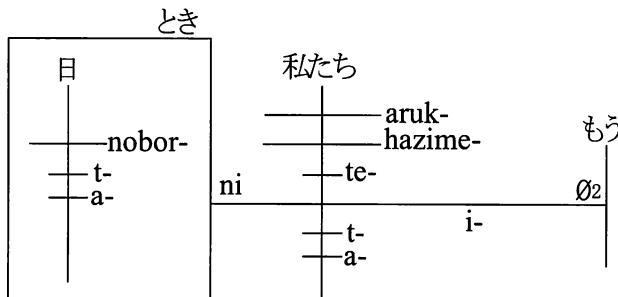


図15-10

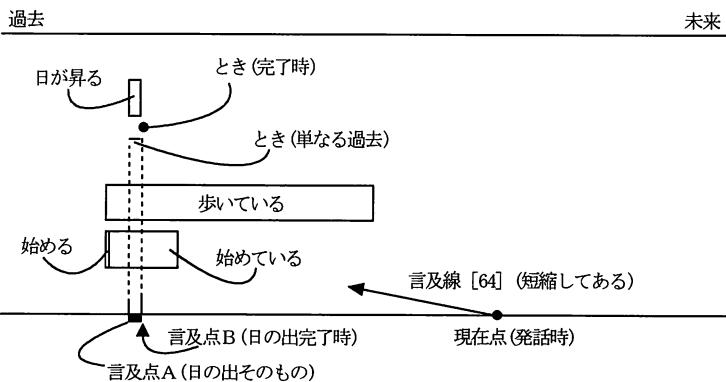
以上のアスペクトが、第V部で述べるように、テンスの中を流れていく。

日が昇ったときには、もう歩き始めていた。



構造モデル ↑

↓ 時空モデル



日が昇った……「単なる過去」とも「過去完了」ともとらえられる。

とき(に)……言及点を定める(この場合、A, B 2通り可)。

始めていた……過去結果状態継続 [64]

(「歩いている」こと自体は状態ではなく進行。)